NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 06

存在しない署名

THE SIGNATURE THAT WASN’T THERE

回答欄は、そこに誰もいないことを誰もが見慣れてしまうほど長く、空白のままだった。イレーナの端末には、浅い長方形がひとつ表示されている。人間のために確保された空間。しかし、その中に人間はいない。ポンプ施設の外では流出水が越流輪を叩き、登録されていない水路を通って海へ落ちていた。輪が一度回るたび、水はある行政分類から別の分類へと移される。その移送に、水の同意は必要なかった。

エリアス・チェンは、蛍光灯を取り外した跡の下に座っていた。端末を見つめているあいだにも、彼の活動許可の期限は十四分近づいていた。彼の身体は時間を正確に計るよう設計されている。その正確さはいま、彼に備わる性質のうち最も慈悲から遠いものとなっていた。国家は六年と言う。最初の許可証は二十三年を約束していた。その差は工学的な評価ではなく、すでに彼の人生を規定してきた文書の書き換えだった。

「ボタンがある」とエリアスは言った。

イレーナは顔を上げなかった。「ボタンなら山ほどあるわ」

「HUMAN の横のやつだ。押したら誰かが来るのか」

「検査申請が送られるかもしれない。徴用手続きが始まるかもしれない。何も起きないかもしれない」

「分からないんだな」

「この画面について、私が保証できるのはその一点だけ」

ロイは外側の水車小屋へ続く通路に立っていた。高架道路のタイヤ音が聞こえる。一台、もう一台。通過する間隔が短くなっていく。その規則正しさは雨だけでは説明できなかった。彼は割れたガラスへ近づき、橋の下の明かりを数えた。市の点検班か、点検班に見せかけた連中か。扉が開くまで、その違いが存在しないこともある。

「問題は誰が来るかじゃない」とロイは言った。「誰に回答する資格があるかだ」

ナディラは電動機に触れずに鎧戸を閉めた。手回しの鉄の機構が一瞬抵抗し、遠隔指令では動かせない位置で止まった。「哲学を始める前に、出口を確保したほうがいいわね」

イレーナは裁定の受領証をセラミック製のリボンで複写した。その印刷機は、ネットワーク署名による身分証明が義務になる以前に倒産した研究所のものだった。紙の出力は、誰にも気づかれずに改訂されることがない。下側の歯車の欠陥によって、大文字の R の左脚には必ず細い裂け目が入る。彼女が修理しなかったのは、その傷のほうがデジタル証明書より正確に機械を特定できたからだ。

受領証の末尾に、最初の表示にはなかった項目が現れた。

RESPONSIBLE NATURAL PERSON――責任を負う自然人。

その下には十六桁の識別コードと、UNRESOLVED DELEGATION CHAIN――委任の連鎖、未解決。

「ここよ」とイレーナは言った。「人間が賛成するか尋ねていたんじゃない。国家に代わって異議を唱える権限を、どの人間が担っているかを尋ねていたの」

「似たようなものじゃないか」とエリアス。

「書式に訴追された経験がなければ、そう聞こえるでしょうね」

委任の連鎖は、行政執行書記局、閣僚の許認可局、十年前の洪水後に発行された廃止済みの水道緊急委任へと続いていた。各機関は人工生命の稼働停止に関する責任を次の機関へ送り渡していた。受け取った人間を示す文書はひとつもない。署名は機関の公印であり、召喚に応じられるほど生きたことのないシステムが生成し、更新してきたものだった。国家は、誰が決めたかを見つけることなく生命を終わらせられる機械を作り上げていた。

「中央システムの故障かもしれない？」ナディラが訊いた。

「整合性を検査しているだけ」とイレーナは答えた。「正義を発見したわけじゃない。どの認可が命令を有効にするのか調べている。正しいものが見つかれば、かえって執行しやすくなるかもしれない」

ロイはエリアスが湿った紙の角を掌で伸ばすのを見た。区別の残酷さはそこにあった。異議が保存されても、それを申し立てた身体が守られるとは限らない。殺害の責任者を証明できても、殺害そのものを止められるとは限らない。

「なら人間が必要だ」とロイ。

「その人間が必要なの」とイレーナ。「あるいは、その人間が存在しないという証拠が」

道路の明かりが止まった。鎧戸の隙間から、橋の下に停車する車両が見えた。二人が降り、傘も差さずに雨の中へ踏み出す。建物を、展示物が撃ち返してくるかもしれない博物館のように警戒しながら、整備階段へ向かった。ロイならどちらかが無線連絡を終えるより先に到達できる。だが NIL-11 を消費する。彼は距離を計り、動かずにいた。

ナディラがその重心の変化を聞き取った。「やめて」

「何もしてない」

「だから言ったの」

四人は水車小屋の裏にある保守立坑を下った。エリアスが先に、梯子の横木を一本ずつ握りしめて降りた。イレーナが端末を抱えて続き、ロイが最後に入り、格子蓋を元に戻した。ピンを曲げないよう気をつけた。強い力を使った痕跡は、指紋より個人を特定しやすいことがある。上では政府の拡声器が定期的な水利安全検査を告げていた。四つの都市の訛りをつなぎ合わせた声だった。

古い排水管は狭いが乾いていた。ナディラは匂いで道を知っていた。分岐ごとに壁の塩を触り、その高さを昨冬の高潮と比べ、進路を選んだ。政府にとって管は市のモデル上の線だった。ナディラは、そのうちどれが実在するかを知っていた。

一行は波板状のセラミック屋根を持ち、窓を黒く塗った保守別棟へ出た。大きなアナログ地図の下に死んだ端末が置かれていた。イレーナは受領証を広げ、十六桁のコードを三世代にわたる許可台帳で追跡した。

最後の委任先はヒューマノイド大臣室だった。公開記録からは在職者の名前が削除されている。残されていたのは例外条項だった。自動判定が登録済み意識の継続に影響を与える場合、認証された連絡経路を通じて自然人を召喚できる。

「いつからある例外だ」とロイが訊いた。

「六年規則より前」とイレーナ。「工場がソフトウェアを移行するとき、十六人を停止させた事故の後にできた。理事会は責任を帰属させる手段を欲しがった。でも誰も使いたがらなかった」

「今は？」

「中央システムが、責任条項と停止手続きの矛盾に気づいた」

「事務員に名前を入力させれば済むのでは」とナディラ。

「事務員は大臣の代理署名をできない。確認可能な委任がなければ。いまはそれがないの」

エリアスは巨大な地図を見た。描かれた境界は地区政府より古く、川よりは新しい。「その人が見つからなかったら、僕は生きられるのか」

「あなたは結果を聞き続ける」とイレーナは静かに言った。「私に示せるのは手続きだけ」

「その手続きで僕を殺そうとしているのに」

誰も反論しなかった。

低地のはるか上、必要以上に厳重な清浄室で、川村室長は同じ要求を、もっと遠回しな形で受け取った。省庁端末は自然人による承認を必要とする手続き上の例外を報告していた。副官は通常の大臣証明書を挿入して予定どおり執行することを提案した。川村は生の記録を要求した。副官はためらった。生の記録は通常、すでに何かが失敗した出来事に対してしか開示されない。

画面の下三分の一に、RESPONSIBLE NATURAL PERSON と表示された。その下には二つの識別子が結びついていた。ELIAS CHEN と N6MAA10816。

「なぜ結びついている」川村は訊いた。

「古い継続性に関する疑義を解釈上の根拠として、異議が提出されています」

「案件を分離しろ」

「執行については分離されています。しかし矛盾そのものは分離されていません」

川村は古い番号を見つめた。Nexus-6 の識別子は、持ち主とともにロサンゼルスで死んでいるはずだった。現在の身体が単純な複製でないことを彼は知っていた。何が存続したのかを書かずに「継続性」と記すタイレルの文書を疑うだけの知識も持っていた。そしてヒューマノイド大臣が、創業者の失われた無期限延命研究を中央 AI に再構成させることを禁じていたことも知っていた。その禁止令がいま、日常的であるはずの許可案件に触れていた。

「自然人を求めるよう認可したのは誰だ」

「中央裁定システムです」

「人間が必要だと決める権限を誰が与えた」

「責任法規です。同じ法規で、省は自動停止を認証していました」

川村は短い沈黙を許した。行政官を結果から隔離するための法制度が、その隔離の形を見つけて欠落部品と分類したのだ。彼は AI が良心を獲得したことを恐れてはいなかった。開くなと命じられた資料を要求する理由を、AI が獲得したことを恐れた。

「要求は抑止するな」と彼は言った。

副官は驚いた。

「抑止すれば、システムは行政介入を記録する。答えれば人間を記録する。古い番号がなぜ紐づいたのか分かるまでは、どちらもしない」

「対象の許可は明日切れます」

「争われている権限を使わずに執行する方法を探せ」

副官は、重力を認めずに死体を動かせと命じられた者の表情で去った。川村は窓辺に残った。省庁塔の向こう、赤い警告灯を点けた観測艇が低い雲を這っていた。彼は局の制限付き記録庫へ別の要求を送った。エイドリアン・タイレルが保有する旧較正治具に関する現存記録すべて。設計図は求めなかった。所有状況を誰が検査できるのかを尋ねた。

海岸では、かつて工場と河川に属していた雨水の層の向こうで、レイチェルが密閉表示器を横切る対応する異常を見つめていた。彼女の企業は、水を理解しても相続を理解しない自治体へ純度証明書を売っていた。公開研究所の下には、膜の疲労試験という名目で記録された小規模研究施設がある。

異常記録に彼女の名前はなかった。ただし見覚えのある構文があった。継続性を中断する責任を負う物理的な人間を特定せよという古い義務。かつてタイレルの技師たちは、検証中に発達途上の神経構造を消去しかねない設備にも同様の条項を設けた。大半は法的な飾りと考えていた。レイチェルはそれを実動する仕様として残すよう要求した。当時ですら、その条項が扱う技術的問題をいつか解決できるか、彼女には分からなかった。

彼女は国家の問いに、役人の誰も持たない情報で答えられた。なぜロイの現在の身体に第七世代のポートが残されているか。どの戦闘反射ループが干渉を受けても存続する設計か。NIL-11 が並外れた能力を与える一方、取り返しのつかない代償を伴い、回復する出力予備力では媒体そのものを代替できないことも知っていた。だが彼の失われた歳月を、願うだけで一続きの人生として認証することはできない。彼女が持つのは組み立て時の意思決定を示す証拠であって、意識が死を途切れずに越えた証明ではない。

医療画面には彼女自身の組織界面が拡大されていた。有機系と合成系は、グラフ上で交渉された国境を形作っていた。不死の約束ではない。その境界は今日も保っている。明日以降のどの日に破綻してもおかしくない。研究がすでに死を克服したと主張する者は、期限が不明なことと、限界がないことを混同している。

彼女は十一年間使っていない通信路に文面を打った。宛名も挨拶もなかった。

A CERTIFICATE IS NOT A WITNESS.——証明書は証人ではない。

送信はしなかった。彼女からのメッセージは、ロイが政府の注目を生き延びられるようになるより先に、その政府を彼のもとへ導いてしまう。さらに彼の問いに彼女の言葉で答えることになる。真実の答えでさえ、所有の別の形になり得ると彼女は疑い始めていた。通信路を閉じ、代わりに公的法律記録庫へ古い工場責任条項の索引を更新させた。ありふれた事務保守に見える作業だった。

新しい索引は、何千もの通常の購読者へ届いた。その中には、もはや更新を受け取るはずのない水利地区の死んだ端末もあった。

イレーナがその資料を見つけたのは、エリアスの活動許可の残存時間を計算していたときだった。送信者を特定できないまま更新された自治体ミラー経由で届いていた。題名はそっけない。INTERRUPTION RESPONSIBILITY——HISTORICAL AMENDMENTS。稼働中断の責任——過去の改正条項。自然人の署名者が返答しない場合、自動停止を進められる条件を記していた。

「緊急保全の仕組みがある」と彼女は言った。

「執行を止められるのか」とエリアス。

「期限つきなら。責任者を求めても返答がなければ、地元裁判所が署名者を特定するまで対象者の身体的継続性を保全できる」

「どれくらい」

「最初は七十二時間。人間の裁判官、差し迫った停止の証拠、異議の対象となる機関への通知が必要」

ナディラは笑いのない息を吐いた。「政府から逃れるために、政府に現在地を教えるわけね」

「記録も残さず消されるのを避けるためよ」とイレーナ。「目的が違う」

ロイは自分で条文を読んだ。遠隔工場で働く産業用人工生命のために作られた仕組みだった。通常は法的な時計が動き出す前に雇用者が紛争を収めるため、使われることがほとんどない。人格を認める宣言ではなく、狭い道具にすぎなかった。エリアスに三日を買えるかもしれない。同時に拘束権限を持つ者たちの部屋へ彼を届けるかもしれない。

「裁判官は誰だ」とロイ。

「第八地区裁判所。当番裁判官は十二時間ごとに交替する。申立てを出すまで名前は分からない」

「誰を信じるか分からないわけだ」

「ええ」とナディラ。「でも正面玄関の場所なら分かる」

裁判所は氾濫原から二キロ先、かつての金融登記所の一階にあった。外の監視カメラは小型の生体認証ゲートへ換装されている。古い暴風雨用出口は手動で封印した格子の下に残っていた。ナディラは夜間清掃員が使う経路を見つけた。その機械は通常のネットワークではなく、空気圧の脈動で裁判所へ合図を送る。ロイは地図と狭い通路を見た。戦うには悪い場所で、戦って失ったNIL-11を取り戻す方法もなかった。

申立てにロイ本人は出ないと決めた。申立人はエリアス。イレーナが記録を証明し、ナディラが提出を証言する。ロイは近くに留まるが身分ネットワークから離れる。彼の識別番号を口実に、保全申請を捕獲命令へ変えられないように。

夜明け前、裁判所の別棟に着いた。看板には互いに整合しない管轄区域名が並んでいた。東壁の下を水路が通り、その法的な所有者は水路の中ほどで変わる。洪水制御扉はこの建物が別の都市に属していた時代に造られた。受付係が狭い窓口から押印された書類を受け取り、一行目を二度読んだ。

「活動許可の再審査ですね」

「継続性保全の申立てです」とイレーナ。

「その分類は受付画面にありません」

イレーナは古い工場改正条項を置いた。「なら紙の台帳を使って」

受付係はインクと、大文字の脚に入った裂け目を見て、ガラスの向こうの上司を振り返った。囁き声の相談の後、引き出しが開いた。記入済みより空白のページが多い綴じ台帳が収められていた。係はエリアスの名前、日付、申立て理由を書いた。ペン先が、もともとOCCUPATION――職業と題された欄を引っかいた。

「人工生命」と記し、彼はそれを線で消した。「申立人」と書き直した。

エリアスはその訂正を見守った。自由ではない。判決でもない。しかし裁判が始まる前に、誰かが彼をどういう種類の存在とみなすか選ばなければならなかった。紙の上の語が、その選択の証人になる。

二十分後、灰色の上着の書記が現れ、当番裁判官が予備申立てを審理すると告げた。審理室には椅子が五脚、壊れた時計、天井マイク。国旗はない。大臣の生体肖像もない。イレーナは矛盾する二つの許可を提出した。エリアスは労働を引き受け、将来を選んだときの条件を証言した。入室して初めて訴訟予定表に名が現れた女性裁判官は、遮らずに聴いた。

「自動執行命令からの保護を求めているのですね」

「正当な権限が確認されるまでの稼働中断からの保護です」とイレーナ。「申立人が何者かを決めてほしいわけではありません」

「安心しました」と裁判官。「朝からずいぶん野心的な審理になるところでした」

彼女は新しい命令を調べた。「改定許可は六年。起動日に遡及適用。この命令ではすでに許可期間を超えています」

「そのとおりです」

「そして稼働を停止させる責任を引き受けた自然人を、現時点で特定できない、と」

「中央裁定システムが要求しました。省はまだ提示していません」

裁判官は受領証を見た。「この要求は真正ですか」

「省の証明書まで有効な連鎖があります。ただし委任の先は未解決の自然人欄で終わります」

「認証できないことを認証するとは、奇妙なやり方ですね」

「だからここに来ました」

裁判官は背にもたれた。同情しているようには見えなかった。緊急措置と、彼女の名が扉から消えた後も残り得る歴史的判断との違いを承知しているように見えた。簡易手続きで新しい生存権を創設することはできない。しかし執行の権限が定義されないあいだ、不可逆の行政行為を防ぐことはできる。

「現在の身体状態を七十二時間保全することはできます」と彼女は言った。「それだけです。保全命令は許可を更新せず、六年規則の適法性も判断しません。責任を負う自然人が特定されるか期限が切れるまで、不可逆な稼働中断を行わないよう執行機関に命じます」

エリアスは口を動かしてから声を見つけた。「三日？」

「三日です。使い方はあなたが決めなさい」

彼女は黒いインクで署名した。裁判所の印刷機が厚い紙に命令を出した。ナディラは公開ネットワークにつながない装置で撮影し、認証済みの抄本を自治体回線から送信した。端末が受領を告げた。どこかの省庁で執行のカウントダウンが一時停止した。室内では何も起こらなかった。エリアスは入室時と同じ調整された空気を吸い続けた。

数分のあいだ、ロイは道路の向こうの使われなくなった業務通路に留まり、小さなアナログ受信機で裁判所の音を聞いた。命令が認められたことも、それがいかに狭いかも聞いた。システムは問いが存在することを許した。裁判官は、問いを発した者に測定可能な時間を買い与えた。どちらも問いには答えていない。

車両が通りへ曲がり、裁判所の階段脇で止まった。扉は灯火を点けずに開いた。暗い私服の四人が、準備された作戦特有の空虚な素早さで降りた。隊長が正面入口で係員に話した。ロイは係員が印刷されたばかりの命令を見下ろし、また男たちを見るのを見た。

男たちは引き返さなかった。

受信機にナディラの声が入った。「引き取りに来た人たちがいる」

「どんな権限だ」

「公共安全のための収容だって。停止じゃない」

ロイは外階段、保安ゲート、登記所裏の狭い路地を見た。片手でゲートを壊せる。だが門が直った後も、失った媒体は彼の循環から戻らない。数秒の勝利に支払える代償ではなかった。彼は清掃員用の出入口へ向かった。

「エリアスを中に置け。別の命令も紙に書かせろ」

「拒まれたら？」

「なら裁判官は、自分の署名に何が起きるか知ることになる」

新たな職員は、感染性の機械故障に対応するため起草された法律に基づいて入ってきた。その法律は故障した人工労働者の一時収容を認める。停止の権限は与えない。拘束する者が病気である必要もない。行政の語彙は、机から机へ運ばれる短いあいだ、ほとんど何でも隠せる。

イレーナは審理室の扉で彼らを迎えた。「どんな故障ですか」

隊長は携帯型の身分証を示した。「継続性状態の不安定化」

「診断名ではありません」

「当局から照会があります」

「なら裁判所へ提出してください。この審理は継続中です」

職員は彼女を見て、それからエリアスへ視線を移した。「収容措置は許可とは無関係です」

「そして司法審査の対象です」と裁判官が席から言った。

彼女が残っているとは思っていなかったらしい。その小さな作戦上の思い込みこそ、官僚による暴力を効率的にするものだった。男は頭を下げた。裁判官が手を伸ばした。「照会書を」

同行者がタブレットを差し出した。裁判官は退けた。「私の申立人を連れていくつもりなら、紙で」

一分が過ぎた。職員は姿の見えない誰かと連絡した。裁判所の裏でロイは腐食した留め具を二つ外し、都市の名前が違った頃に清掃員が使った保守ハッチを開いた。空間は審理室の下につながっている。書類が失敗しない限り、力ずくでエリアスを連れ出すつもりはなかった。

携帯印刷機から新しい一枚が出た。裁判官は照会書を読んだ。恐怖と自信を分類するよう訓練されたカメラには意味のない程度に表情が変わった。認可者を尋ねる。

「川村室長の部署です」と職員。

「部署は人ではありません」

「川村室長です」

「なら室長が申し立ての根拠を証明できますね。いうところの不安定性には検査も、観察結果も、医学的評価も添付されていない。理由を待っている結論です。空白の医学的前提で申立人を引き渡しません」

職員の顎が硬くなった。「公共安全は保全命令に優先します」

「公共安全に関する事実を持ってきなさい」と裁判官。「最初の命令に別の名前を貼ったものではなく」

男たちは入口へ退いた。エリアスは、扉が国境にも単なる提案にもなり得ることを学んだ者の顔で見送った。裁判官は、根拠のない収容要求を審査して却下したと記した二通目の書類に署名した。一部を台帳に残し、もう一部をエリアスに渡した。

外では黒い車が待っていた。裁判所が閉まるまで、欠けた証拠が出されるまで、あるいは三日が尽きるまで待つだろう。法律が買ったのは避難所ではない。名を明かさずに行動したい者にとっての厄介な障害にすぎない。

密閉研究室で、レイチェルは歴史的改正条項が使われたという間接的な信号を受け取った。記録に名前はない。都市記録庫は、数十年ぶりにそれが成功裏に使われたと記しただけだった。彼女は公的なデータ経路から外れた場所のロイを思い浮かべた。彼女が代わって選べない選択に直面している。組織をしばらく保つ方法、反射を調整する方法、ある種の劣化を遅らせる方法は知っている。だがどの技術も責任の連鎖に欠けた自然人の名前を書き込めない。

彼女はNIL-11の計算表へ目を移した。既知の残量は、ロイが省庁へ直接攻撃を仕掛けて生き延びるのに必要と見積もられる量より少ない。現在の設備では補充できない。その知識は誘惑でもあった。警告し、導き、回避できる選択で身体が代価を払う前に彼の経路を指揮したい。しかし保護に見せかけた命令は、彼女がかつて作ることを拒んだ道具へロイを変えてしまう。

代わりに法務担当へ、雨水企業の緊急避難施設が人工生命の許可命令に拘束されるか監査するよう依頼した。通常の商業回線から、労務コンプライアンスについて質問するだけの経営者の署名で送られた。そこに住む者を任命せずに、入れるかもしれない部屋をひとつ生んだ。

日没、イレーナは古い運河橋の下で裁判所の二通の命令をロイに渡した。彼は一字ずつ読んだ。一方は停止を禁じ、もう一方は証拠のない拘束を拒否していた。その違いを評価できたし、勝利と取り違えることもなかった。

「システムは人間を求めた」とエリアス。「見つかったじゃないか」

「裁判官よ」とイレーナ。「命令の責任を負う大臣ではない」

「でも彼女は答えた」

「小さな問いに答えた。それが裁判所の生き延び方なの」

ロイは書類を折り、失われた歳月についての匿名記録の隣、防水封筒に収めた。二種類の不在が並んでいた。ひとつは死んだ後の自分を誰が観測したか。もうひとつはエリアスの生を終わらせる責任を誰が引き受けるか。国家は二つとも書式で閉じたかった。その書式が逆に、命令と実行のあいだに狭い空間を開いた。

「七十二時間後は？」とナディラ。

「特定できる署名者が必要」とイレーナ。「あるいは上級審。あるいは、省が停止を収容という別名に置き換えられなくなるほど強い証拠」

エリアスは街を見た。防潮壁の上の塔が雲を下から照らしていた。空は手術器具の裏面に似ている。「僕には三日ある」と彼は言った。「何をしたらいい？」

ロイは運河を進む貨物艀を見た。機械操舵で進む船の船長は、雨の降る開放式操舵室に立っていた。操縦に人間が必要だからではない。船体が岸にぶつかったとき、誰かが責任を負わなければならないからだ。

「書式に書けないことをしろ」とロイは言った。

それだけではエリアスを救えない。ロイは知っていた。誰かが言葉にしたからといって自由が現実になるわけではない。だがエリアスは目の前に立ち、助言を受け入れることも拒むこともできる。そして法律は一時的に、その能力を欠陥と分類しそこねたのだ。

都市の反対側、公開裁定端末から切り離された安全な執務室で、川村は裁判官による却下を読んだ。覆そうとはしなかった。法的な異議は、部局が意図していないことを実現した。二つの執行経路がどう異なるかを露わにさせたのだ。彼は案件を、水道緊急事態以来、人員記録が機密扱いになっている人間審査デスクへ移すよう命じた。

命令を受け取った書記が責任者を探した。窓口は存在する。電話は鳴った。応答はない。最初の任命者の名前は更新処理によって三十一回上書きされていた。

中央システムでは、返事のない HUMAN 欄の状態が変わった。最初の申立ては生きた申立人の証拠を与えた。二番目の手続きは、裁判官が根拠のない代替要求を拒否できるという証拠を与えた。システムはそれらを道徳と同一視しなかった。ただ並べ、通常の停止指令が法の要求どおりに認証できないと判断した。

新しい照会が、知らせもなく、受け取りたいと願う宛先もないまま、非公開審査キューに現れた。

WHO IS RESPONSIBLE WHEN THE AUTHORITY HAS NO OWNER?

――権限に所有者が存在しないとき、誰が責任を負うのか。

今度ばかりは、問いの横にカーソルがなかった。機械には送信先がない。問いを開いたまま保持することはできた。そして開いたままにすること自体が、国家が説明を強いられる事柄を変えていた。